

■ パネルディスカッション

「ながくて未来フォーラム」

コーディネーター：黒神 聰（愛知学院大学法学部教授）

パネリスト

瀬口 哲夫（名古屋市立大学大学院芸術工学研究科教授）

菊地 正悟（愛知医科大学医学部教授（公衆衛生学））

小島 祥美（愛知淑徳大学コミュニティ・コラボレーションセンター講師）

松山 有美（名古屋経営短期大学子ども学科講師）

相原 愛（長久手町環境審議会委員）

加藤 梅雄（長久手町長）

【進行（黒神）】 今日 MC の洗川さん、それから町長のほうからもありましたように、本当に大変な惨害が今、東日本で起こっているわけです。私たちの住むこの地域でも、東海地震、東南海地震、さらに南海地震ということで、連動する可能性があります。そのときには今回の M9.0 以上になるのではないとも言われています。国の法律で、私たち大学でも必ず 1 年に 1 回、避難訓練をしなければならないことになってきています。

今日のこの未来のまちづくりといったことについてですが、この 3 月 11 日にこのようなことがありました。まさに町長が行政を担当なさってから掲げてこられた安全・安心のまちづくり、今後、本当に腹を決めてまちづくりを考えていかななくてはいけないのではないかと思います。今起こったらどうしますか。

私は阪神・淡路大震災の 3 日目に現地入りしましたが、本 1 冊を頭の上に置き助かったという方のお話を聞きました。私たちは日常の中でリスク管理をしていく必要があるのではないかと思います。

福島から東京への放射能の影響について考えたとき、御前崎の浜岡原発についても考えざるを得ません。私は直接浜岡まで訪ねていきましたが、もしあそこに巨大な津波がきた場合にはどうなるのでしょうか。今、三重苦の中で一番大きな問題の一つに放射能問題があります。

本当に背筋が寒くなるようなことですが、そういったようなこの時期に、この長久手市制施行にあたって未来のまちづくりをどうしていこうか、パネリストの皆さま方からお話しいただきます。次世代育成まで含めまして、長久手に住んで良かった、住みたいというような、そんなまちにしていくためのヒントをいろいろお話しただこうと思います。

ではまず名古屋市立大学の瀬口哲夫先生からお願いしたいと思います。よろしくお願ひいたします。

【瀬口】 最初に今、司会のほうから、これから市制、長久手町が長久手市になるわけで、先ほど町長さんからもいろいろ説明がありましたように、長久手町というのは、皆さんがよくご存じのように、緑に囲まれていて、区画整理が大体市街化区域の 8 割ぐらい。市街

化区域の倍が調整区域ですので、この周りが、3分の2が緑になっていて、3分の1のところは計画市街地というものです。これは8割計画的につくったというのは、先ほどの話ですと昭和40年代から区画整理が始まったわけですので、名古屋市、都市圏の人口増をうまくキャッチしてこれまでまちづくりにずっと引っ張ってきたということだと思います。

先ほどの基調講演を伺っていて、そのまちづくりの中で、例えば西側の半分が区画整理をしているという中で、区画整理の中で小牧・長久手の戦いの戦跡の部分をほぼ公園にしているんですね。これはただ漫然とまちづくりをしたわけではなくて、区画整理をした方が、こういう歴史を残したかたちでまちづくりをしてきたということだと思います。

ですから先ほどの話をそれと重ねていただくと、現在の人たちもそういうことを行っているということですので、今後の市制になっても、やはりそういうこれまでの先人の知恵と言いましょか、ただ古いものを壊すというわけではなくて、どんどん重ねていくということが必要だなと思います。

それから、8割計画市街地、いわば私どもの言葉で良好市街地と言います。先ほど震災の話がありましたが、震災で非常にダメージをこうむるというのは、道が狭くて、いわゆる密集市街地というところなのです。歴史的市街地とは違って、昭和30年代、40年代にスプロールしたと言っていますが、秩序なく家が建っていったという東京や大阪に多いわけですが、そういうところが名古屋圏にはほとんどないということですね。ですから長久手町は、この地域の都市計画の優等生であるということはあると思います。

緑がやはりちょっと少なくなりつつあると思うので、今、名古屋市で緑化地域制度というものを入れています、名古屋市の郊外は大規模な開発、一定規模以上の開発については敷地の3割を緑化しなければいけない。壁面緑化、屋上緑化を含めてですね。ですから、この緑が非常に豊かな長久手の場合は、やはり次の時代を見据えて、こういう緑を増やすということを考えなければいけないのではないかと私は思います。

それから、なんだかんだと言われて、人口が減っていたということも言われていて、そういう視点でまちづくりを見ますと、インフラという公共交通機関がない居住地、そういうところは決定的に今もう衰退化しています。昭和30年代、40年代の郊外の住宅団地、これは非常に不便になっていたわけです。車に乗ればいいじゃないかと言うのですが、車も使えない人がどんどん増えるわけです。そのときに、災害が起こったときもそうですが、孤立化してしまう。そういう意味で言うと、万博がたまたま来たのでリニモがあるということで、これはまだ今、ちょうどランニングコストがペイする状況です。ですから、これを更新ということですと持続的に、将来の長久手市の中に、公共交通機関を維持しようとする、それは一つ、将来のまちづくりの視点の中で市民の皆さん方が話し合っとうするかを決めていくことが課題かなと思います。

そういう意味では、先ほど町長さんが「コンパクト」と言われていましたが、集約型の市街地、できるだけ鉄道駅の近くに住む。郊外のほうは、ちょっとばらばらと住むというようなイメージです。

通常、駅前の地価が高くて、離れたほうが安いわけですから、安いところの土地利用を高くしたほうがディベロッパーとしては儲かるわけですが、そういう土地利用をさせない。

つまり市民の考え方で、駅の周りにできるだけ集約して、その利便性を高めるということが、今後 30 年、40 年の持続性あるまちづくりという考えの中では、非常に重要なのではないかと思います。

それから資産としては、西側のところ、非常にたくさん緑があり、特に研究機関、大学や県の研究機関がある。これは大変な資産です。こんな資産を持っている町というものはないわけですから、これは地域の宝物として、うまく生かして育てていかなければいけません。ですから、例えば良好な市街地があるところに研究したい、勉強したいという人が来るわけで、交通機関のないところに大学があるなんていうことは、もう今、名古屋都心回帰ですので、交通機関とセットしたまちづくりということは、どうしても欠かせないのではないかなと思っています。

【進行（黒神）】 ありがとうございます。瀬口先生は都市計画、そして景観ということで、本当にいろいろなお力添えをいただいているわけですが、今おっしゃったように長久手というのは大学の町であり、そのようにこれだけ揃っている町などというものは、そう簡単にはないわけですが。これはまさに資産だということで、これが住民力、あるいは地域力にどのようなかたちでリンクされていくのか、また話が発展するかもしれません。

さあ、では健康の分野ということで愛知医科大学の菊地正悟さんのほうからよろしくお願いします。

【菊地】 今日は地域の健康増進と災害対策ということを簡単にお話しさせていただきたいと思います。

愛知医大のほうでは、これまで災害拠点病院、第三次救急医療病院、特定機能病院として、高度救命救急センターなどの運営を行ってきましたが、さすがに創立から 30 年を超えましたので、最新の技術を取り入れて、病院の中心となる建物の建て替えを行うことになりました。それについて簡単に説明をしたいと思います。

これが完成予想図です。一応、地下 1 階、地上 14 階ということで、竣工が平成 25 年秋、開院が平成 26 年初頭ということなのですが、ちょっと先の東日本の大震災によりまして、建設業界のほうで忙しくなるので、これが若干遅れるという話がすでに出ています。全体としては 900 床で、新しい病棟で 800 床、ここに ICU や手術室、外来等が全て入るようになります。

これが現在のメインの A 病棟、B 病棟ですが、これと外来棟は取り壊しまして、今の平面駐車場のところに新しい本館が建ちます。C 病棟、D 病棟、研究棟については、今回は建て直しを行わずにこのまま使うというかたちになります。

これが空から見た新しい病院の鳥瞰図で、ここは昔のままですが、ここにあった建物がなくなって、こちらのほうへ移る、こういうかたちになる予定です。詳しいことは入り口のところにパンフレットと、DVD での紹介も行っていますので、ご覧いただければと思い

ます。

これは新病院の建設にともなって、基本方針ということで、「患者さんの視点に立った病院」とか、「地域から信頼される、機能的で安全性の高い病院」等、5つの基本指針というものを作っています。

もちろんこういった新しい施設も重要なのですが、やっぱり何といてもそこで働くスタッフの充実というものが、やはり医療機関としては基本だろうと考えています。

一例ですが、今年の5月、もうあと1カ月ちょっとですが、これまで若干手薄だった糖尿病について新任の教授が就任して糖尿病センターがスタートします。こういったかたちでマンパワーの面での充実を図っていきたくて大学のほうでは考えています。

ご紹介にもありましたように、私はこちらへ来て10年ぐらい、長久手町の地域保健対策推進協議会の委員をさせていただいています。この中で、私が会議に出ていろいろ聞かせていただいている内容について、一部、今日ご紹介したいと思います。

まず母子保健については、県の制度とは別に、一般不妊治療助成制度というものがあります。その他、ここにあるような母子手帳、これはどこでもやっていますが、あといくつかこういった母子保健に関するものがあり、長久手町はかなり充実していると思います。

あとは新しく転入してきた方にも説明会があるなどということで、今日おみえの方ですと、ご自身というよりはお子さん、あるいはお孫さんの世代に、おそらく関係することではないかと思いますが、ぜひまたご家族の方に話していただければと思います。

それから中学3年生にHPV（ヒトパピローマウイルス）のワクチンが始まりまして、この間、私も中学校に行ってきたのですが、非常に痛くて評判が悪いのですが、3回やらなければいけないということになっています。法律で定める3種混合などの予防接種の他に、こういったものも町の費用で行っております。

それから成人保健としまして健康手帳の交付、それから胃検診ですね。胃がん、それから胸部検診、肺がん、それから大腸、乳がん、子宮頸がん検診、前立腺がん検診、歯周疾患検診、こういったものを行っています。保険制度が2、3年前に変わりました関係で、社会保険の家族の方などは、いわゆるメタボ検診と言われている血压やコレステロールの検診というものを町で受けられなくなったということで、だいぶ混乱があったように聞いていますが、こういった検診は町内にお住みで対象年齢になっている方でしたら、いくら個人負担がありますが受けられます。

町でのこういった施策というものは、かなり力を入れてこれまで行われてきているようで、私の目から見てもかなり充実したものがあると思いますので、ぜひ利用していただければと思っています。

実はこれが話の主題なのですが、これからこの町でまちづくり、あるいは協働ということでどういうことをやっていくかということになりますが、長久手町の特徴として、とにかく町内に大学が非常に多いということがあると思います。これをまちづくりにもっと生かしていただきたいと思います。

教育では、私どもはもうこちらの町の保健センター、それから地元の医師会の先生方にも講義・実習などをお願いしています。

逆に私ども、市議会の委員などもやらせていただいています。今回、ちょっと中学3年生の性病予防の話を、南中学と長久手中学の2カ所でやりましたが、結構生徒さんたちは熱心に聴いてくださったので、機会があれば、またこういった面での教育もしたいと考えています。

今回の震災につきましては、医療チームの派遣とか、他の大学等でも行われていると思いますが、ドクターヘリの派遣などを行っています。

先ほどの山村先生のお話にあったように、この地域というのは、もちろん地震もそうなのですが水害も温暖化にもなる気候のブレが大きくなっていくということで、これからの災害としてはあり得るのではないかと思います。

そういった災害対策ということなのですが、私は先ほどの3月11日は東京の市ヶ谷というところにいたのですが、携帯が全然通じなくて、何が起きたのか分かりませんでした。大体30分か40分して車で説明を聞いて分かったような状況ですので、そういった中で、やっぱり重要なのは、地域の行政や医療機関等が、こういった災害時にお互いに連絡を取れる体制というのは、やはり確保しておかなければいけない。それが普通の電話回線ではちょっと難しいということを実感しましたので、何らかのそういったものというのは必要だと思います。同時に、やはりそのとき初めて話す相手ですとコミュニケーションが取れませんので、やはり地域で定期的に会合をもって、お互いに顔見知りになっておく、そういったネットワークというものをつくっておくということが、いざというときの備えとして非常に重要なのではないかと思います。

今ちょっと災害のことがクローズアップされていますが、がん対策、その他の健康増進などに関しても同じようなことが考えられると思いますので、ぜひこの地域に大学があるということを生かしていきたいと思います。

それから自分たちのところの宣伝をするわけではありませんが、大学と一般病院の違いは、私どものように患者さんを直接は診ないで研究をしている部門もありますので、そういったところもまたぜひ地域で活用していただいて、このネットワークづくりというものを進めていけば、やはり安心できる町というものにつながるのではないかと思います。以上です。

【進行（黒神）】 ありがとうございます。安心のまちづくりという意味では、本当にこの愛知医大は、まさに医療拠点として、そういう意味では非常にありがたいわけです。私も愛知医大にずいぶんいろいろなことに関わっていますが、今回もドクターヘリから何かからずいぶんご協力いただいているようです。

むしろ最後に先生がおっしゃった部分でいくつかの点は、時間がありましたらまた少しお話しただけだと思います。健康のこと以外にも、災害時、万が一のことも含め、地域のネットワークづくり、話し合い等々を常時からしていき、お互い顔見知りになっておく、

信頼を築いておくということが非常に重要なのではないかということをおっしゃっていただきました。とても大事な点であろうと思います。

では次に入っていきたいと思います。愛知淑徳大学の小島祥美先生、よろしくお願いいたします。

【小島】 大学というより、大学生と町が協働することの意義ということから、未来のまちづくりにとって、学生自身どんなことに貢献できるかということについて、私のほうからご提案を含めてご報告したいと思います。

私が今所属していますのは、コミュニティ・コラボレーションセンターという教育センターなのですが、こちらは、年齢や性別、そして国籍、障害の有無等も含め、「違いを共に生きる」という本学の理念の実現を目指した、「地域に根ざし、世界に開く」をモットーに、学生たちの実践力をはぐくむ、そうした教育センターがコミュニティ・コラボレーションセンターと申します。略して「CCC」と皆さまから愛され愛称で呼ばれています。

2006年の9月に開設して、私もこの開設と共にこちら愛知淑徳大学のほうに赴任しました。

このCCCではどのようなことをしているのか、簡単にご説明したいと思います。地域、この長久手町さんにも大変お世話になっております。またこの町内にごぞいます企業さんやNPO、NGOの方々、そして行政、教育機関の皆さまの地域のニーズと、そして学生、それはゼミ単位でもあったり、学部や学科のその専門のことを学んでいる学生たち、それ以外にもサークルですとか、さまざまな部活動で活躍している学生たちの思いをつなげていく、そのさまざまな人たちとの出会いの場等をコーディネートしていく、それがCCCの役割です。そのさまざまなコミュニティとの架け橋等をしているのがCCCなのです。このコーディネートの中で、具体的に地域の方々と学生を結び付け、そして具体的な活動を実践していく、そんなことを行っています。

本学は現在、約8,000人の学生がおりますが、大変うれしいことに、約5人に1人はこうした活動に参加し、活躍しているというのが実態です。

実際にこの長久手町内で活動している学生たちですが、例えば灯路まつりでのお手伝いをはじめ、この地域にある高齢者施設ゴジカラ村さんの中での定期的な演奏会を行ったりしています。また防災やリニモの活性化、そうした事業の中に学生たちが自分たちのプログラム等を企画し展開していったり、また愛・地球博から生まれた地域通貨EXPOエコマネーを学内みんなで貯め、そのポイントで植樹しています。近年では市が洞小学校ができるたびに、そちらの前を皆さんと緑化したり、また北小学校の近くでも植樹活動を行いました。

また最近では長久手町の広報紙の表紙も本学の学生が写真を撮り、そちらを掲載させていただいたり、そのようなかたちで今学生たちと地域の皆さまと一緒に活動をしています。

その中で一事例なのですが、2007年度から行っている町内の小学校と長久手町の環境課さんと本学の学生たちとの連携、協働から生まれたグリーンマップづくりについて少しご

紹介したいと思います。

こちら、50カ国600地域、世界で行われている活動なのですが、長久手町さんも万博以降、万博力ですが、大変積極的に、かつ活発に行われています。この活動、世界共通の絵文字、マークがあるんですね。こうした目のマークがあったり、こうした安らぐようなマークがあったりというかたちで世界共通のマークなのですが、このマークを持ちながら自分たちの町を歩く、そして町のいいところや、自分たちの地域の環境のどんなところがいいんだろうということを歩きながら考えて地図を作る、そんな活動を2007年度から行っています。

そして2009年度からの具体的な活動として、町内の小学校は6校ありますが、1年に2校ずつその校区の子どもたちと本学の学生と一緒に自分たちの町を歩き、例えばこの目のマークですと、「ここは眺めがいいんだよね。僕、ここ好き」、そんなところに貼っていきながら自分たちの町を見直していこうよ、そんな活動を行っています。

2009年度から行いまして、3年後ですが、2011年度、日付に直しますと2012年の3月には全ての町内の小学校の中でこのマップが完成する、そんな活動に学生たちと一緒に取り組んでいます。

2009年度から行った子どもたちです。長久手町の小学校をはじめ、次に東小学校、そして今年には南小学校と西小学校の子どもたちと行いました。約500人の子どもたちと今までこのような活動をしてきました。

そうした中で、学生たちがこの当日等は企画するのですが、私も若い若いと思っけていても、やはり学生たちの若さには負けてしまうんですね。学生たちと小学生たちの距離は、あっという間に短期間できゅっと縮まります。ですので、その対話から生まれる会話や、また活動は、とてもとても私たちの予想をはるかに超えるようなさまざまな展開に進むんです。そしてその対話によって、たくさんのことを学生は吸収し、また子どもたちも一緒に楽しんでくれているようです。

この活動が終わったときに、子どもたちはこんなふうに言います。「楽しかった。またお兄ちゃん、お姉ちゃんに会いたい。今日、お兄ちゃん、お姉ちゃんたちと話したことのほうが楽しかった」

また、こうしたいろいろな世界共通のマークを持ちながら町を歩くことによって、普段通っている通学路がいつも見えているものと違って見えた。「こんなところに花が咲いているのか。こんなところに田んぼがあるのか。こんなところにこんな虫がいたのか。僕たち知らなかった」、そんな声を子どもたちからもたくさん聞きます。

また、なかなか今、縦のつながりを共感するような、一緒に活動するような場づくりが少ない中で、お兄ちゃん、お姉ちゃんたちも子どもたちから大変学びを得て帰ってくるんですね。新たな出会い、そして新たな学びがたくさんあります。

お兄ちゃん、お姉ちゃんたちは、この活動だけにとどまりません。一緒に町を歩く中で、大学生たちはこんなことを言います。「長久手町の中を今日歩いてみたら、たくさん竹林

があった。竹林って、どんなふうに行っているのか」、そんな話がこの開催後、学生たちと反省会の中で出てきました。ある活動の一例です。

「人が手入れしなければ環境は保全できないことってあるんだよね。そのままにしておくことが環境保全ではなくて、やはり人の手というものが必要なんだ。それが竹林なんじゃないか」、そんな会話等が大学生たちの中から、この町を歩くことによって出てきました。

今回、東北等の中で、大きな大きな地震等ございました。私自身、実は阪神・淡路大震災の中で、被災された外国人住民の方、地域住民の方の支援をするというボランティア団体を立ち上げ、8年ほど神戸で活動していた人間です。そうした神戸での活動について、学生たちによく話をします。

その中の1つとして、実はキャンドル作りの話をしました。阪神・淡路大震災は平成7年（1995年）1月17日に起きました。そのときに被災され亡くなられた方たちの人数のキャンドルを作り、皆さんで祈りの日を持ちます。実は兵庫県内には竹林がたくさんあるのですが、そこで間伐で切られた竹を使い、そのキャンドル作りを行っていきます。また、その使った竹は竹炭にしまして、地域の方々、また神戸の協力してくださる皆さんに販売し、その収益金を翌年度の「1.17 祈りの日」の費用に使っていく、そんな活動を神戸でしているのですが、私自身もその活動をしていました。

「実は神戸でもこうした活動をしていく中で里山ということを考え、また地域の中でできることをとを考えていく中で、そんなこともあったんだよね」という話をしたことがありました。そこで学生たちは、「そうなのか」と言っていました。

そうしたことを何とかこの長久手町で子どもたちと一緒に考えるような場づくりをしたい。マップ作りだけで終わるのではなく、この町をどんなふうに行けるのか、若者たちで考えていけるような場づくりをしたいということで、「竹とエコを考える」、TAKecoというスクールを開催しました。このネーミングは学生がしてくれました。学生たちが、この地域で竹林や里山保全で活躍、活動されている方々、NPOの方々、ボランティアの方々からお話を伺い、また実際に間伐に参加し、そのことを子どもたちに分かりやすく伝えていく、そんな講座を行いました。これがそのときの寸劇の様子ですが、劇にして里山の保全の話をし、また家にある廃油を使ってキャンドル作り等を行っていく、そんな活動にしました。

学生たちはこの町を歩きながら課題を発見し、行動し、実践に結び付けていく、そしてその中で長久手町の町内で活躍、活動されている方々からたくさんの学びを得て子どもたちに伝えていく、そんなことも学生たちはしていったんです。

こうした活動を通じて、大学生との、大学との協働という中から、私自身も学びました。新しい活動の誕生があるんですね。地域からは「新しい発想力がほしい、こんなことができたらいいな、あんなことができたらいいな」、そんなお声をいただきます。

そうした中で、大学、特に学生たちは若いんです。そしてセンスや、やる気は、たくさんあります。その中で協働、つまり新しい活動が誕生していくんですね。この地域、未来

の長久手町にとって、意欲を育てる場づくりに学生たちも大きく貢献できる部分であるのではないのでしょうか。学生もこの地域の「地域力」の一人として、今後のまちづくりの中で大きく貢献できることを期待したいと思います。ありがとうございました。

【進行(黒神)】 ありがとうございます。では次に名古屋経営短期大学、松山有美先生、よろしくお願いいたします。

【松山】 私からは、長久手の子育てをめぐる現状と今後の課題について、少しお話をさせていただきたいと思います。

まずは前方の資料をご覧ください。長久手は子育てに関していくつか特徴を持っています。まず1点目として、長久手町というのは生産年齢人口、つまり15歳から65歳未満の人口が町全体の人口に占める割合というのが、愛知県の中で最も多いということがあります。

2点目として、平均年齢というものが37.5歳と非常に若い、愛知県一若い町ということが特徴です。

つまり子どもが多い、または子育て世代というのが非常に多いということが長久手町の特徴です。

また、下に載っていますように出生率ですが、長久手町は1.44となっています。愛知県の1.43、全国の1.37に比べて多少ですが多いということが一つ特徴であります。

こうした中、長久手町は、平成22年より5カ年計画で子育て支援の計画を施策として策定して、実際に実施しています。「楽しもう 支えよう ながくての子育て ー地域のきずなで子どもたちが輝くまちにー」というスローガンの下、子育て支援に力を入れてまいりました。その中で、主な柱を3つ挙げています。1つ目は子どもたちの「子育て力」を育成する。子育て力というのは、皆さん、聞きなれない言葉かと思いますが、子どもたちが自分たちの力で成長していく力を地域住民、町を挙げて支援していこうという意味です。

親たちの「子育て力」を支援するというのは、まさに子育て支援を通して、親たちが子育てをするために必要な情報、知識、場の提供をしていこうということです。

そして3つ目の柱が「地域のきずなで支える子育て」、地域にある地域力、町長のお話にもありましたが、住民力を使って子育てを支援していこうというのが最後の柱になっています。

このスローガンから分かるように、本日のシンポジウムのテーマであります協働、つまり共に力を合わせて働きかけるとというのが子育て支援の中にも十分発揮されているというのが分かっていただけだと思います。

次に具体的なお話をさせていただきます。こちらはこのホールを出てすぐそこにある長久手町立の中央図書館で行われる、おはなし会の様子です。こちらは大体月に4回ぐらい行われる日本語の読み聞かせと、あと英語の本を読み聞かせするという活動が行われています。

ここで本や紙芝居を読んでいただくのですが、この方たちは図書館のボランティアの方、

もしくは図書館の職員の方とあって、地域の方が参画して行われます。この様子は0歳から乳幼児の読み聞かせのクラスです。これは子どもたちの発達、教育の場であるとともに、日ごろ子育てに奮闘してお母さんたちが集まって、情報を交換したり、自身の交流の場として十分に活用されています。

現在のところ、2,900名以上の親子が参加して、毎回多くの親子が集まって大盛況になっています。

他には、先ほど菊地先生のお話にも出ていましたが、保健センター、保健所を主催とした出産準備のためのパパママ教室だったり、離乳食を作るお料理教室だったり、親子の体操教室等も開催されています。

また、長久手で非常に力を入れている子育て支援のネットワークづくり、特にファミリー・サポート・センターが主催しておりますファミリー・サポート・サービスというのがあります。こちらは子育ての経験がある方を中心に、自分の子育ては終わって、もう子どもも独立して孫がいるというような世代の方を中心に、町のファミリー・サポート・センターに登録していただいて、長久手にいる子どもたちを自分で預かって、保育サービスを提供するというような保育支援を行っています。

この写真に出ていらっしゃる方は、地域の長久手町の育児支援の会員の方です。こちらは小学校6年生までのお子さんを持つ親がサポート・センターに登録して、時間を区切って、支援会員の方に子どもを預けることができるというサービスです。こちらも援助会員、60名を超える子育ての支援会員の方に登録していただいています。現在のところ500名の「預けたい」という親が登録して、2,000件以上、預かった、もしくは預けるというような活動がなされています。

その他に、もちろん児童クラブとか学童保育等、子どもの年齢に合ったきめ細かい保育支援、もしくは児童サポートというのを長久手町はこれまでに提供してまいりました。

その他、まちづくりの観点からも、公園の充実であったり安全マップとって子どもの学区の中で「子ども110番の家」といって、不審者がいたり、何か通学路内で困ったことがあれば、その110番の家に逃げ込むという、そういう場所を地図にして子どもに持たせたり、防災のブザーを小学校1年生の子に提供するなど、安心・安全のまちづくりというものも、子育て支援の側面から行ってきています。

こうして、長久手町は子育て支援をめぐって、非常に大きな取り組みをさまざまな角度から行ってきました。その結果として人口が増加する中で、特に若い世代の人口増加が高いこと、もしくはこの地域周辺の中で子育てがしやすい町と認知されてきたということは、一つの大きな成果ではないかと考えています。

しかしながら、子育てというのは社会の状況によって、そのニーズというのは非常に流動的です。近年は社会状況を背景に経済的な理由から、共働きの家庭が非常に増えてきています。ですので子どもを預けたいという親のニーズが高まってきています。

現在は、長久手町は6の保育園の中で800名ぐらいの枠を持って子どもを預けることが

できるので、いわゆる待機児童というものは存在しないのですが、もし預けられるなら預けたいと、潜在的な保育所ニーズというものは、その人数に待機児童というかたちでは表れていませんが、これから増えていく可能性は十分に考えられます。

ですので、社会状況、もしくは親のニーズを迅速にすくいあげて、的確なサービスをこれからどんどん打ち出していくということが、長久手町が市に変わっていく中で、重要な課題の1つになるのではないかなと考えています。以上で終わります。

【進行（黒神）】 ありがとうございます。小島さんと松山さん、お二人の場合、いろいろな切り口があるわけですが、子どもさんたち、くれば次世代育成、次世代づくりということにもなるわけです。

小島さんの場合には、そういうようなことをやることで、学生力というか、学生の生き方、例えば長久手町への関わり、そういったようなものに大きくつなげていきたいんだという、そういう発想ですし、松山さんの場合には、今までおやりになってきた中で、より実態の部分の踏まえて子育て支援ということで、後ほどまたいくつか質問もさせていただきますと思います。

さて、地元でいろいろとご活躍なさっていらっしゃる長久手町環境審議会委員の相原愛さんから、またひとつお話しただければと思います。

【相原】 いつものように名簿順ということであれば、トップを切って私の部分は終わり、この時間にはほっとしてここにいることができると思っていたのですが、教壇に立たれてこのような場でお話しすることに慣れていらっしゃる先生方の素晴らしいお話の後で、よりによってこの順番かという感じで、この場にいるのもとても恐縮しております。

専門的知識が全くない私が、大変な役割を簡単に引き受けてしまったなというのが、今この場にいる正直な感想です。

しかしそんな私が有識者の先生方や加藤梅雄町長とパネリストとして同席させていただけるのは住民と行政が連携、協力してまちづくりを進める協働が不可欠という、2010年の長久手の協働ルールブックから見る町の考えが、今回形になったものだと思います。

私は小さいころからこの地域に暮らし、この町の成長を肌で感じながら共に成長してきましたので、これからのこの町の発展には、こうであってほしいという並々ならぬ熱い思いがあります。

というわけで、この画期的な催しに一住民として出席させていただけることを光栄と思い、2人の娘を持つ母として、主婦としての立場から、これからのまちづくりに期待することをお話しさせていただきたいと思っています。

長久手町は東名高速道路の開通、名古屋市営地下鉄東山線の藤が丘駅までの延伸、これらのインフラの整備により、名古屋市に隣接する町として徐々に発展してきました。そして東部丘陵線リニモが町内初の鉄道として開業し、愛・地球博の会場へのアクセスの要として大きく貢献し、この万博の成功が一気に国際交流の町として長久手町を躍進させました。

2005年に行われた愛・地球博は、長久手町に大きな変化をもたらしました。その中でも私が特に感じていることが3つあります。1つ目として、町内においていろいろな国の方とお会いする機会が増えたことです。万博開催を機に、住民自身が日々の生活の中でいろいろな国の人たちと触れ合う機会があり、知らない国の人や文化に対して柔軟に受け入れられる姿勢を自然に学び、国際理解を進める上でのしっかりとした土壌ができたと感じています。実際、私もALTの先生の英語ボランティアということで、小学校のほうに行く機会があったのですが、やっぱり外国籍の子がちらほらということが普通となってきています。それを自然に受け止めている子どもたちの姿もそこにありました。

2つ目は、愛・地球博が環境に配慮した万博として注目されたことから、環境に対する住民、行政の意識の向上の変化です。とにかく環境という言葉はとても意味合いが大きく、一概に「環境への取り組み」と言っても、住環境、ごみ問題、自然保護、生物多様性からCO2削減などと多岐にわたり、どこから手をつけていくべきかという感があります。しかし現在、私は環境審議委員として議会に参加させていただいていますが、町としても住民、地域の企業と共に環境問題に手探りながらも真剣に取り組んでいこうという前向きな姿勢を感じています。

そして3つ目として、万博閉幕後に十分な乗客率を確保できないというリニモの問題をもたらしたことです。万博会期中に2,200万人の来場者を迎え、環境に配慮した乗り物として話題を呼び、会場までのアクセスの要となったリニモですが、第5次長久手町総合計画にも掲げられているとおり、今、リニモを生かしたまちづくりが、町のみならず、愛知県の最重要課題となっています。

以上のことから、私は万博の理念を風化させることなく継承させていく大きなイベントの開催が万博記念公園であるモリコロパークで行われることが有効であると考えています。

とかく行政としては、ハード的な設備への投資を考えがちですがソフト面であるイベントの内容の投資によって、より充実した有意義なイベントの開催が可能だと思います。イベント内容の充実は大きな集客力を持ちます。そのことにより、リニモの利用は絶対条件となってきます。

愛・地球博を成功させた我が町、長久手だからできるイベント、環境へのメッセージを発信し、国際交流を推進する活動を万博の地で継続的にやっていくことがとても重要であると思います。それがモリコロパーク、そして長久手町の魅力となると思っています。

これは「こどものひろば集客力向上検討会」でも議論されたことでもあります。そして愛知県の大村知事のマニフェストの中で、「リニモに乗ってモリコロパーク（愛・地球博記念公園）にみんな集まれ！！」とし、「環境に配慮した野外音楽施設を整備し、森と芝生、緑の中でコンサート、フェスティバルを楽しもう！」、また「国際交流を推進し、こどもの国際理解や外国語に親しむ機会を向上」ということを掲げています。

現在、国際理解教育に取り組むのは子どもの成長過程においても早いうちからとても重要と考えられています。国際理解と一言で言うと、まずは外の世界、違う世界に関心を持

つということが頭に浮かびますが、ここには相互理解という観点から自分の町、国について相手に伝えるという重要な側面があります。

実際、私自身も、万博をきっかけに他国を知り、そこで知ったジャマイカという国や文化、ジャマイカの音楽であるレゲエを紹介するイベント、ジャマイカデー・イン長久手町との共催で行ったわけですが、そこであらためて外から見た日本という国、自分の町である長久手について、もっと知りたい、もっと知るべきだという気持ちが大きくなりました。

ただ、そのイベントの開催までには大変な苦勞がありました。一般の主婦が一事業を開催しようとするわけなので、分からないことばかりというのは当然だと思っていましたが、まず提案したいイベントがあってもその窓口が分からない。誰に聞けばいいのか分からないという点での、最初の一步を踏み出すことさえ大変でした。

私はたまたま同じような立場でイベントを企画したお友達が近所にいたので、その方に関して「文化の家」の窓口にとどり着きましたが、モリコロパークにおいては、長久手町内にある施設でありながらも県の管轄になっているので、住民がその窓口を探すのはさらに大変なことが想像できます。

私の主催したジャマイカイベントは素人ながらもできる全てのことをした結果、ジャマイカ大使館、ジャマイカ政府観光局の後援も得られ、当日、ジャマイカ大使館からの公式なメッセージを大使の代理である副領事からいただくことができました。それにより加藤梅雄町長に、国外からの要人を迎える表敬訪問セレモニーを執り行っただき、ジャマイカは一国として万博に参加できずに、万博の会期中にはナショナルデーはありませんでした。しかし、このイベントが長久手町とジャマイカの正式な国際交流の場となりました。意義のあるイベントとして成果を評価されたものの、残念ながら次回開催までの予算を捻出するまでには至りませんでした。

このように、商業利益を追求しない純粋な国際交流の推進のイベントに対して、町の助成がもっと充実していればよいなと思いました。

長久手町は名古屋市という都市に隣接しながらも、一部には里山が広がる緑豊かな町です。そして国際交流の町として一步先を行く町でありながらも、歴史上、重要拠点となった古い歴史を持つ魅力的な町でもあります。

そしてリニモ沿線にはたくさんの大学があります。多くの市や町が高齢化に伴う大きな問題を挙げている中で、ここ長久手は大学との連携により、地域の財産である若い力を生かせる条件が十分に揃っています。そして今の小島先生のお話にもありましたが、それが今、形となっているいろいろな活動に取り組みされていることがその一つだと思っています。そしてそれは新しい発想を生み、子どもから大人まで楽しめるイベントの創出が可能だと思います。

最近では、東北地方太平洋沖地震という信じがたい恐ろしい災害が起りましたが、あまりにも悲惨な光景に呆然とするばかりです。被災地の方々はそんな厳しい状況下におい

でも、自分たちの町が大好きだとお話しされ頑張っておられます。

1995年の阪神・淡路大震災で大きな被害を受けた神戸は見事な復興を果たしました。自分の町をどうにかしたいという住民の思いを行政がかたちとして反映させることで神戸を再生させたのです。住民の郷土愛がより良い町をつくり、活気を与え、時には町に命をも吹き込み発展させていく最大の力となると思います。

住民一人一人の高い意識と、その思いに敏感な耳と、住民と同じ目線を持つ行政、住民のニーズに柔軟に対応でき、それを反映できる行政、また行政内での情報の共有。このような住民と行政の地域協働体制の確立が長久手町のまちづくりに大きな明るい未来と発展をもたらすものだと確信しています。

【進行（黒神）】 ありがとうございます。相原さんはご自分の経験の中で、ずいぶんと頑張っていたいております。そういう中で、ここ長久手町に住む住民としてのプライドというか、胸張って国際交流の場という、そういったような意味では2005年の万博というのは非常に重要な機会を与えてくれたということです。ありがとうございます。

私たちは今、まず今日の山村さんのところで、この古い地図から見た長久手という町の一つの景観をまず見てみよう。とにかくそれがまず最大公約数、われわれ共通項として持つようというところから始めました。

そしてパネリストの方々にいろいろなお話をいただきましたが、やはりリニモであるとか万博というのは、一つの大きな流れであったと思うのですが、どうもやはりそれに至るまでの、いわゆる長久手村、町からいよいよ1970年代、高度経済成長のまさにその真っ只中に入って行く中での長久手の先人、先輩たちの大変な努力、それをどうにかたちでより利便性の高い市街化にもっていくか。いわゆる土地区画整理事業を進めていっていただいた、大変汗を流していただいた人たちがいらっしゃるわけです。そして現在、それを続けていらっしゃるわけです。

そういうところに、たまたま、いよいよ5万2,000有余の人口ということで、人口がいつい目がいってしまいがちになります。確かに長久手町というのは日本一の人口を持つ町です。それは地方自治法の第八条に基づく要件ではあります。どうも私、町からいただいたいろいろな保健衛生施設であるとか、文化施設であるとか、その他租税力等も含めまして、非常に立派な、いわゆる「市」に該当すると思えました。この長久手町が、いよいよ来年の1月4日をもって長久手市として再出発していくというようなお話でございます。

今日はその内の一つの切り口のことですが、町長が少し挨拶の中でおっしゃいましたが、郷土であるとか住民力、地域力、コンパクトシティ。なぜ長久手町は平成の合併に乗らなかったのか。これはまさに一人一人の顔が見えないと、それは駄目だよということで、長久手というのは、本当にただ歴史的な云々というだけではなくて、ここに住民たちの非常に高いプライドというものがあつたような捉え方を私たちはしています。その独自性というものを非常に強くお持ちの長久手町住民の人たちだと思うのです。

そういう中で、いよいよ本当の「市づくり」ということであれば、私は法学部の者ですから、つい法律面から考えてしまいます。例えば地方自治法の十条には、やはりその地域行政のサービスを私たちは等しく受ける権利があり、受けると同時にそれに応分の義務がきちんとあると規定されているわけです。

しかし、市になって、長久手が飲み込まれて顔も分からないような市になって、果たして良好なサービスというものが住民の人たちに行き届くのだろうか。今度の大震災でも行政がダウンと流されてしまって機能不全に陥っています。これでじゃあ県ができますか、国ができますかと言えば、やっぱり基礎自治体というものが非常に重要視されているわけですね。

そういったようなことで加藤町長の場合、そういう意味での長久手というものは名古屋市とも合併しないという捉え方をずっとされてきたのではないかと思います。そこでコンパクトシティを目指すのだと。そのためには住民の、まさに集合地、集めた知識というものを本当に生かしたまちづくりというものをやっていかななくてはならないのだというようなことで、今日のこのパネリストのお話をいただいたのではないかと思います。

この3月11日の震災問題があったものですから急に安全・安心という言葉を使ったみたいですが、これはもう長久手の場合にはずいぶん前から言っていたわけです。1995年、1996年の「長久手町21世紀創造会議」のときでも、安全・安心のまちづくりということをやったわけですが、ひょっとしたら今日の小島さん、松山さん、あるいはまさに相原さんたちのお話の中には、まさにその中にさらにプラス愛情というものがやはりあるのではないかなと痛切に思いました。

そういったようなことで、少しずつお話をいただければと思うのですが、申し訳ないのですが先陣切って菊地先生、今回このような震災がありました。今日のこのイベント、フォーラムでは、この話の予定はなかったのですが、こんなことになりました。

この大震災というようにときに、医療拠点というものは非常に重視されなくてははいけませんよね。そういった意味で、行政との関わりの部分をちょっとお話しいただいたのですが、プラスアルファで何かございましたらお願いします。

【菊地】 先ほどちょっと時間がなかったので言わなかったのですが、大学病院というところは、災害が起こったときに連絡があるのは消防庁から救急要請がある、そのラインだけなんです、実は。自動的にどのぐらいの被害が起きているとか、そういった情報というのは全く入ってこない状況になるわけです。

そうすると、全く町で待っているだけだとしますと、どういう患者さんがどれだけ来るかということが予想できないので、来てから考えるという、非常に効率の悪い体制を取らざるを得なくなります。

ところが町のほうは、今回ちょっと一部、町役場が流されてしまったようなところがありますが、機能が残っていれば災害の情報というものは必ず行政のところへ集まりますので、それをある程度流してもらえると、医療拠点として災害に対する体制、それから迅速

な対応というものがかなりできるようになると思います。

ですので、そういった面で災害時の情報のやり取りができるかたち、これはぜひ必要だと思います。

【進行（黒神）】 そのために、先ほどちょっとおっしゃっていただきましたが、お互いの信頼関係に基づく日常的な常時ネットワークづくりが必要ということですね。

【菊地】 そうですね。例えば町役場の担当の人から大学のほうへ話があったときに、お互いに顔を知らない同士というようなことがありますと、これはなかなか話がスムーズに通じませんので、そういった意味で、そういうときにどういった情報をやり取りすればいいとか、病院の側は何がほしいのか、逆に行政の側は医療機関に一体何を求めるのか、そういったことが能率的にやり取りできるためには、やはり日ごろから顔を合わせる場というものをつくっておく必要があると思います。

【進行（黒神）】 そうですね。ありがとうございます。加藤町長もうなずいて聞いてくださっていますが、ぜひそこら辺はまた工夫していただきたいと思います。

ところで小島さんからは面白い事例研究をお話しいただきました。私のいる愛知学院大学は、業者関係も集めると大体1万5,000人ぐらいいるのですが、そうしますと、今の若い衆にどういった学生力というものを付けていったらいいのでしょうか。

もう今、文科省では「学生の生きる力」を何とか醸成しないとイケないのではないかとということで、そんな会議で引っ張り出されたりしています。

今、小島さんにおっしゃっていただいたような事例研究は、まさに学生さんたちにも大変な素晴らしい経験になりますよね。そういったようなお話で、学生さんたちの声を何か一つ二つご紹介いただけませんか。

【小島】 こうした活動をして学生たちは、決してこの場だけでは終わらず、それを生かして、では自分たちが、例えばそれぞれの学部で学んでいることどんな意味付けがあるのか。またそれだけで終わるのではなく、卒業後もそれぞれのコミュニティで、それぞれの社会でそうした活動を続け、またそのスピリッツを伝えているんですよね。

そのことがある種、先ほどの災害というときにも、地域の方たちとの対話という部分で大きく役立つのではないかと思う部分と、また、大学という部分で考えると、ある種、先ほどの安心・安全なまちづくりといった部分でも、大学というのは、ある種、災害のときの避難所という部分でも役割を果たす部分があるかと思うんですね。

本学は市が洞地域になりますが、ここも大変新しい町であることもあって、きっと住民の方々も、お隣同士の方たちの距離というのがまだちょっと遠かったり、また大きな災害等があったときに、どんなところに手や声をあげていいのかということで困ったりというところがあるかと思います。

そんなときに、ある種、避難所となる大学、本学に限らず、町内には多くの大学があるかと思いますが、普段からのこうした住民の方々との対話が、災害等には限りませんが、最悪のことが起きたときに、ある種、大きな大きな力となって発揮される部分というのは

あるのではないかなと思います。

【進行（黒神）】 そうですね。今、災害の部分に関してお話しただけですが、学生さんたち、おそらく先生がおっしゃったように、卒業してひょっとしたら北海道へ行くかもしれない、沖縄へ行くかもしれないけれども、この若い世代の人たちが、長久手に関わっていた4年間、6年間の経験を、それぞれのその場で、そのスピリッツ、経験というものをずいぶん生かしてくれるだろうと、そういうお話だとお伺いしました。

いわんや、災害などのときには本当に、僕らはもう腰がおかしくてよたよたするのですが、若い衆というのは大変な力になりますよね。またぜひ先生、頑張っていたきたいと思います。

松山さん、子育て支援、まさに次世代づくりですね。そういった中で、瀬口先生はいろいろな切り口をお持ちですので、ぜひ質問していただきたいのですが、次世代づくりという観点から、今の長久手町のこの都市づくりというものの中で、こういった点もぜひ考えていただきたいということはあるでしょうか。加藤町長もいらっしゃいますから、そういったようなもの、あるいは自分たちはこういうことをすべきであるといったようなことが何かありますでしょうか。

【松山】 子育てに関してですが、まず都市計画という意味で質問の1つとしては、やはり公園ですね。子どもたちが遊べる公園を安全・安心を基盤として作り上げる都市計画というものをどのように進めていくのか。もしくは先ほどいくつかお話が出ましたが、長久手町内における公共交通機関の整備、特に子育てをしている世代が安心して町内を移動できる、もしくは長久手町から外に出て行くことができるというような、そういう足ですね。子どもも含めて、子育て世代にとっての足づくりというものを何かご提案がありましたら、そちらのほうを聞いてみたいと思います。

【進行（黒神）】 瀬口先生、先ほど先生から大きな俯瞰図を大体お話しいただいたのですが、今の、例えば先人たちの残してくれたようなものを踏まえて、次世代にむしろそういうようなまちづくりというのは非常に重要であるというようなお話もいただいたのですが、今の公園であるとか、そういったようなものは、先生、やはりこれは非常に要求されますよね。

【瀬口】 公園は、長久手町は区画整理事業でやっていますので、基本的には3%の公園用地があります。街区公園と言っていますが、これが少ないか多いかというわけですが、これは日本の法律が悪いと言えば悪いので、都市計画のモデルは10%です。日本政府がケチくさいので3%。名古屋市は3%。長久手町は今、加藤町長に聞きましたら5%でやっているということですので、ちょっと高いようです。

結局、区画整理は地元の人負担、皆さんの力でまちづくりをしていますので、先ほどの地域力や住民力という一つの表れですよ。

今皆さんがおっしゃっているのは、住んでいらっしゃる方の住民力、それから前から住んでいて土地を持っている方の住民力、あるいは大学の人の住民力、そういうものがおそ

らく結集しないと、これからのまちづくりは難しいと思いますし、長久手は結集できる町だということで皆さんお話しになっていたと思います。

ですから公共交通に関しては、やはり住民が賢くなければいけないと思うのです。郊外に住めば地価は安いわけですし、車があれば便利ですし、郊外の大型店に行けばいいという非常に身勝手な発想で、それで公共交通がほしいなどと言われては、もう立つ瀬はありません。

ですから、やっぱりせっかくきちんと区画整理した駅の近くに住んでいただいて、それで公共交通を利用していただく。つまり東京に公共交通があるのは、それは利用者が多いからペイしているわけで、そんな、人がほとんど乗らないようなところに高速道路をつくったり地下鉄をつくったりしても税金を捨てるようなものですので、その辺は皆さん次第という面があるのです。

今の過疎バスみたいなもの、過疎バスというのは過疎地のバスなのですが、税金がずいぶん入っていますが、これは皆さんがどういうルートがいいかということ議論していただいて、それで住民の皆さんが一番乗りやすい、その代わり負担も皆さんにさせていただく。税金だけではない。そういうことをしていますし、長久手の場合はコミュニティバス、Nバスやスクールバスがありますので、その連携を今とりつつあると思いますが、ぜひうまくとっていただくというようなことなのではないでしょうか。

【進行（黒神）】 そうですね。ありがとうございます。まさに若い町でもあるということ松山さんのほうから教えていただきましたが、子育て世代の人も含めると、半分ぐらいは、非常にそういう若い層の人たちがいらっしゃるんだというお話でした。ですからそこには、お父さん、お母さん方の意見をできるだけ集約したかたちでまちづくりをまたみんなでしていかなくはいけないということもあります。半分はいらっしゃることですから、これは大変なことですね。

今のこの新しい若い世代の人たちということですが、どうも今の長久手町というのは8割ぐらいの人たちが他の地域から入って住んでいらっしゃる方々です。もちろんそこには、もうずいぶん前から家なども購入して、お子さんは長久手で生まれ育ち、今、小学校、中学校に子どもが通っている、そのようなご家庭の人たちも含めてですが、8割いらっしゃいます。

そこで相原さん、これからそういう方、8割と2割と分けることはできないとは思いますが、新しく他の地域から来た方々と、伝統的なところでずっと住んでいらっしゃる方たちとの、いわゆる一体感の醸成というものは、これは非常に重要な課題だと思うのです。

相原さんは、ずいぶんいろいろなことを経験していらっしゃるのですが、そこら辺について何かお知恵はありますか。

【相原】 私がいる地区が長久手西小学校の近くののですが、やはり新しく入ってこられる方と、地域でずっとそこにいらっしゃる方とが、ちょうど混在しているようなところなんです。

長久手町には伝統的なお祭りがありますが、実際、そのお祭りはもともといらっしやる住民の方たちが中心に活動されているわけですが、新しい方たちがなかなか入っていけないという感じがあるんですね。そしてそういう住民の方々の意見もあるんです。

伝統的行事は町の文化遺産でもありますので、それを新しい方とも共有して、一緒にまちづくり、町の伝統行事を楽しみ、町に対することをいろいろ知っていただく機会を持つことが必要だと思います。核家族が多い中でのコミュニティの場として、そういうところがとても重要になってくると思うんです。

ですので、新しい方たちがそういうところに入っていける環境というものが、これからとても大切なのではないかと考えています。

【進行（黒神）】 非常に大事だと思います。この長久手において、おそらくこれからさらに5年、10年かけて6万人、6万5,000人というような人口状況があり得ると思うのです。そういう中で、他地域から来られた方たちと、以前からの住民とより一体感が得られるようなことと言えば、一つの切り口として、例えばそういうお祭りなどで一緒にわいわいしようよというようなことも、きっかけとしていいですよ。

そこで町長、「あぐりん村ござらっせ」なんていうのは、こちらの地域の人たちと、そうでない人たちと、わいわいする機会の場でもありますよね。他の地域から来た人であれ、お米は食べないといけない、野菜は食べないといけないわけです。あぐりん村に行ったらいろいろなものが買えます。温泉に行ってみた。そこで隣にいた人が長久手のことをものすごくよく知っている人だと、そういうこともありますね。

あぐりん村の今の状況は、町長から見ても、非常にうまくいっていますか。

【町長（加藤）】 もちろん株式会社長久手温泉、温泉事業部とアグリ事業部と2事業部制で、第三セクターというかたちで町が主導権を持って経営していきまして、今のところは両事業部とも順調に推移しています。さらに国政、国の農政も考えながら、新たに米粉パンというようなことも、今チャレンジしようとしていきまして、今年からまた農水省からも課長に来ていただくようにしていますが、今後の課題ということで、まだまだ伸びるというか、成長業種の1つだと思っています。

私から一言お礼だけ申し上げていいでしょうか。今日はまちづくりシンポジウムにご参加いただきありがとうございます。これも市制に向けてということで、瀬口先生をはじめ5名のパネラーの先生方にはいろいろな角度から私どもにサジェスチョンと言いますか、持ち前のプレゼンテーションをしていただきました。私なりに咀嚼をしまして、大変力強く思いまして、ここから御礼を申し上げます。

私ども、今文字通り市制を目指して職員一丸となってやっておりますが、今回、各パネラーの先生が発言されたことに対しては、まさに私どもが目指す長久手市制にとっても大事なことばかりです。今日聞いている職員もおりますが、血が騒ぐと言いますか、「やらなきゃならん。なせばなる」の精神で、「市」と名前が変わるだけではなくて、これは何としても名実ともに変えなければならないと強く思いました。

なぜ今市制かということも、いずれまた町民の皆さま方にも私がお話ししないといけないと思いますが、こういういい機会にいろいろなことを言っていました。

私のほうでも、大学連携などいろいろな機会で各大学の先生とお話しする機会は、あるにはあるのですが、このように多くの町民の皆さまの前でパネルディスカッションというかたちでそれぞれ発表していただきましたので、これを無にしないようにしなければなりません。今日は、大変意義あるシンポジウムであったと受け止めておりますし、私どもも、大きな得がたいものを得たと思っています。

時間がないといけないので、先に話させていただいておりますが、私どもの住民力全てをそこへ持って行って頑張っていきたいと思っていますので、今日は本当にありがとうございました。

またご質問についてお受けしますが、取りあえずお礼だけ申し上げたいと思います。ありがとうございました。

【進行（黒神）】 もう少しお時間をいただきますが、町長から時間がなくなるといけないということで、先にご挨拶がありました。

他の自治体よりもこの長久手町というのは、いろいろな特徴があります。大学もあれば研究所的なものもある。あるいは健康の部分であれ、万博を機会に基盤整備がずいぶん進んでいきました。リニアモーターなどというものは世界に冠たるものです。

けれども、ではリニモの経営状況はどうか、瀬口先生がおっしゃるような部分も含めて言えば、われわれはどこまでそれに協力できているのだろうかということで私たちは行政と常にいろいろと話をしているわけですが、われわれが協力できるところは学生さんともども、できるだけしていこうということで、リニモに乗ることのサポート体制をつくらせています。

瀬口先生の本来の話のほうからお聞かせいただきたいのですが、都市計画の観点から、住民力を生かしたまちづくりというものについて、先ほど少しお伺いしました。他にさらにもう少しというようなことはありませんでしょうか。

【瀬口】 難しいのですが、長久手はおしゃれな良好な町だと思うのです。だから皆さんが住みたいと思っています。そのように変身してきたわけです。それを壊そうと思えば簡単なのです。ちょっと変な建築物をつくれればいいんです。赤い建築物、青い建築物をつくらせて、勝手なビルをつくるだけなのですが、それを、「いや、やっぱりみんなが住みたい」という町に持続的にしていくには、やっぱり何かみんなが話し合っただけでルールを作って、自分たちの住まいのところは変な看板を出さないとか、秩序を立てましょと、住んでいる人たちのコミュニティもそうなのですが、住んでいる空間そのものも非常に重要なのです。

それから交通もやっぱり話し合わないといけないと思います。過疎バスの例を出しましたが、過疎バスは話し合わないと、やっぱり持続できないのです。

ですからリニモも、今は乗っている方で大体ランニングコストはペイしているということですので、それをもう一ランク上げようとする、先ほど言いましたが、もし無いと大

学の人も研究所の人も困るでしょうと。やっぱり地域の資産として、あることによって非常に特異性が出るので、まちづくりをするときの開発の在り方みたいなものも地主さんが協力してくれなければいけないし、住んでいる方もやっぱりそういうつもりで買っていたかどうかと言うのでしょうか。緑もたくさんしていただくということがない限り、やっぱりこれから人口が減る中で差別化したかたちで、どこの都市も競争しようとするわけですから、そういう中で大学や何かがあるということが非常にメリットで、企業も郊外型ではなく先端型のいい企業に、今東北のほうは非常に大変なのだけれど、東京から今結構こちらのほうに IT 産業は移動しています。

そうすると長久手町なども、そういうのが少し、避難の方も一緒に、少し考えることができるかということも、日本全体の中の産業の配置として考える必要があるということで、これは行政が考えてもなかなか行政だけでは駄目ですから行政を引っ張らないといけません。ですから、そういう意味では、住民力、地域力は、ぜひ頑張っていたかなければいけないなと思っています。

【進行（黒神）】 ありがとうございます。

【町長（加藤）】 ただいま瀬口先生がいろいろおっしゃいましたし、パネリストの諸先生方も言われましたように、長久手町の環境を例えると、僕は巨人ファンというわけではないのですが阿部がホームランを打ちますと「最高」という言葉を使います。やっぱり最高のいい環境を諸先輩の力で与えられているからでしょうか。ですからこの環境を守っていかなければならない。同時にもっと伸ばしていかななくてはならない。

そういう中で、今日いろいろパネラーの先生たちがおっしゃったプレゼンをどうやって活用していくかということになります。

愛知医科大学を例に取りますと、近くに県立大学もありますが、あそこにはいくつかの語学の科があります。スペイン語もある、英語はもちろんです。そういったところでボランティアを学生さんにもお願いする、あるいは卒業生でもいいと思うのですが、災害が起きたときにお医者さんにその患者の気持ちを伝えるという語学のボランティアを、愛知医科大学さんは必要としていないか。私は県の国際課にも申しているのですが、「やってみたらどうか」というような話もいただいています。例えばですが、そのようなことなど、いろいろあると思います。

今日は本当に参考になりましてありがとうございました。そういうことだけ申し上げて、これからどんどん、今日おっしゃったことを無にせず、われわれも真剣に考えていきたいなど。本当にいいディスカッションだったと思っています。

【進行（黒神）】 ありがとうございます。今のお二方のお話のとおり、やはり、例えば緑などというのも先人からの大事な大事な預かりものをわれわれは受けていて、それはどうしても次世代にバトンタッチしていかななくてはいけないものです。まさに十数年前の「長久手町 21 世紀創造会議」で、「本当に魅力ある町でなければ出て行きますよ。住民をやめて行きますよ。やめていけばいいんだから。魅力あるところへ行けばいいんだから。長久

手に閑古鳥が鳴きますよ。そうでないことをするためには、ではどうしよう」という話になったと思います。なるほど。都市とどういのかたちで融合させていくか。田園バレー構想というものがそういう中から出てきて、ずいぶんこれは先進的なことをやっていたね。Nーバスなんていうものも、長久手は全国でも2番目ぐらいではなかったでしょうか。あとからずっと各自治体が真似していったと思います。

そういう中で、やはり瀬口先生がおっしゃってくださったように、これはぜひ、「行政に任せるんじゃないんだ。われわれ一人ずつがどう考えるかなんだ」という考えでいくべきだと思います。ドイツなどではそれがものすごく徹底しています。そのようなことが非常に重要なことであろうと先生はおっしゃってくださったのだと思います。

話をちょっと変えます。松山さん、僕は素人で全く分からないのですが、ファミリー・サポートについて話が出たと思います。未就園児というようなものは、次世代づくりという意味で、お母さん、お父さん方にとっては、やっぱりものすごく大事な問題だと思います。未就園児の問題などはよく出ますよね。

つまりそういうような意味でのファミリー・サポートの話が出ましたが、これは先ほど数字も出ましたが、長久手の今の実態をもう一度教えてください。

【松山】 ファミリー・サポート・サービスというのは、先ほども申し上げましたように、子育てを一旦終えられた方々を中心に、援助会員とってファミリー・サポート・センターに登録していただきます。その方が大体、現在60名ほどいます。

片や、小学校6年生までのお子さんをお持ちの親は、それを利用したいとって、またサポート・センターに登録する。この方たちが大体500名組ほどいます。その500名の中に、自分も預けたいんだけど、自分も預かってもいいという方がいらっしゃいますので、その援助会員のみだと少し人数が少ないかなという印象を受けるかもしれないのですが、相互会員とって、預けるし、預かってもいいという方が500名の中に半数ぐらいいらっしゃいますので、人数的に、十分とは言えませんが確保できているという感じです。

【進行(黒神)】 「預かってもいいですよ」と言われたときに、リスク管理の問題が大きいと思います。そのときに例えば何か講習をするとかがあるのでしょうか。

【松山】 はい、おっしゃるとおりで、自分の子ではない、他者の子どもを預かるというのは、もちろん責任もありますし、それにとまなうリスクももちろんあるということで、援助会員の方と相互会員の方には講習を受けていただくということが基本になっています。

ですので、ここにいらっしゃる皆さまも少し自分に時間的な余裕があるという方は、ぜひファミリー・サポート・センターのほうに連絡していただいて講習を受けてサポートしていくことによって、自分たちが住む長久手の中で、未来の住民力というものを育てていく助けが皆さんにもできるわけです。今ある住民力は未来の住民力を育てて、外に出て行かない、長久手に永住しようという方が増えていけばいいのではないかなと思います。

あともう1点ですが、大学の話がよく出ていますが、長く住んでいくという意味では、やはり小学校、中学校というように、義務教育段階の公教育の充実も重要になってくると

思います。

長久手は小学校を終えて、名古屋市等の私立の中学校に進むお子さんが多いと統計上も出ていますが、そうではなく地域の学校に子どもたちを安心して通学させられるような、より充実した公教育、低年齢の公教育というものも重要になってくるのではないかと思います。

【進行（黒神）】 ありがとうございます。いくつかの独自路線をずっと歩んできた長久手町。それは先輩たちのおかげであろうと思うのです。やはりこれから長久手町から長久手市というかたちになってきますと、これから将来にもわたって、この長久手の色を出していくためには、新しい住民の人たちと一体となるということが必ず必要になってきます。

その切り口は、お祭りであってもいい、あるいはあぐりん村であってもいい、温泉であってもいいと思います。温泉でたまたま知り合った地元の人に土地を5坪借りて、実際に農業を教えてもらっているという話を私も聞いたことがあります。

あるいは今松山さんのお話にもありましたように、子育てをある程度経験した方が「預かってもいいですよ」と言ってくさる、そういう場から、何か一体的なものが芽生えてくるかもしれないといったことにも、すごく関心を持って聞いておりました。ありがとうございました。

予定より15分ほど超過してしまいましたが、本日は貴重ないろいろなお話を皆さん方からいただきました。今後、長久手市に施行が向かっていくにあたりまして、今いただきました話というのは、たまたまの切り口であろうと思うのです。おそらくいろいろな会がこれからも催されると思いますが、町長、またいろいろと住民の方のお話も含めまして、ぜひ積極的に聞いていってあげてほしいということをお願いしたいと思います。

パネリストの皆さま、本当に貴重な時間をありがとうございました。

それではこれもちまして、本フォーラムは終わらせていただきたいと思います。貴重な時間をありがとうございました。

(拍手)

(終了)